

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

## バスてい

小三・小泉 真奈花

わたしは、バスていにいた。なにも考えず、ただそこに立っていた。

わたしは、たちばなみさき。小学三年生。どこのバスていかわからない。わたしは、時こく表を見た。するとそこに「天国行きバス」と書いてあった。りかいができない。なぜわたしが天国行きのバスにのらなきやいけないの。もういちど時こくひようをみた。そこには時間はかいていない。ただ一文、こう書いてあった。

「さいごに会いたい人に一人だけ会えますよ」

どういうこと？ わたし、しんじやつたの？ もう村のみんなには、あえないんだ。そんなのいやだ。今すぐここからにげだしたい。けどむりだ。だってまわりはぜんぶ山。だから、時こく表に書いてあるように心に会いたい人を思いうかべた。すると目の前に、お母さんが立っていた。そしてやさしく頭をなでて、こう言った。

「いつでもお母さんは、あなたのみかた。みんなの事をわすれないでね」

その一言を言うとお母さんはきえてしまった。わたしは「もちろん」と思った。でもきえてしまうなんてまぼろしだったのか気になった。けどそんな事はどうでもいい。だってお母さんに会えたんだもん。うれしかったからなのか、かなしかったからなのか、なみだがあふれてきた。そしてみんなのことを思いうかべた。友だちの

まきちゃん、お父さん、おじいちゃんそして村の人たち、思いだすたび、なみだがあふれてきた。するとそこにバスが来た。そこには、去年死んでしまったはずのおばあちゃんが座っていた。そしてわたしは、おばあちゃんに引きよせられるようにバスにのった。するとすぐ、おばあちゃんが手をにぎってくれた。とてもあたたかかった。なみだがどんだんあふれてきた。おばあちゃんが、わたしのなみだをやさしくふきとってくれた。そしておばあちゃんが天国のことを話してくれた。天国は、みんなの町のようにスーパーがあったり、家があったり、畑があったり、遊園地があったり、えいがかんがあったり。わたしは、わくわくした。だってわたしは村にすんでいたから、スーパーも遊園地もえいがかんもしらない。早く行ってみたいと思った。わたしは、おばあちゃんが大大すき。小さいころから世界で一番大すきだ。だから、おばあちゃんが死んでからかなしくて、空を見るたび、しずかにないていた。だから、もう会えないと思っていたおばあちゃんと再会できて、とてもうれしかった。おばあちゃんといっしょなら、天国もたのしそうだな、とおばあちゃんをみつめると、おばあちゃんが、

「みさきちゃんは、もうここでおりるんだよ。大きくなったね。会えてよかった」

なぜおりたかは、わからない。たぶんおばあちゃんをこまらせたくないからだと思う。遠くを見ると夕日がきれいだった。みとれていたら、なまぬるい風が首をくすぐった。

ハッと目がさめた。すると家であっているねこのミーちゃんが首をくすぐっていた。家のソファの上だった。その時ぐーとおなかになった。キッチンに行ってみると、お母さんから「先にごはん食べててね」という手紙ととなりからあげとおにぎりがおいてあった。

---

からあげをチンしてもどると、テーブルの上に一通の手紙があった。

わたしあてで、おくり主は、なんとおばあちゃん!!

ゆめじゃなかったんだ。わたしは手紙を手にとった。

---